

医者も知らない平穏死



連載39

▲長尾和宏 長尾クリニク院長・日本尊厳死協会副理事長 著書に「平穏死」10の条件」など。

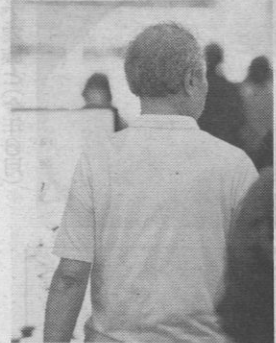
92歳のAさんは自宅でいよいよ最期を迎えさせてしまおうと、息子さん(男)と、息子さんは男を喉に詰まらせて、呼吸を止しながら話して、吸停止状態に陥りました。

境目は、大変分かりにくいものです。もうすぐ自蔵庫の扉に「救急車を呼ぶ前に長尾先生に電話」人が、救急車を呼んだばとデカデカと書かれた紙が張られていました。

慌てた家族は救急車をと。それは、蘇生処置もいなくなつた延命治療を、もし自分や家族が不治要請。救急隊員の心臓マッサージにより、病院到着時には心拍と、それに続く延命治療の再開しましたが、人工呼吸への意思表示です。ただ、私が在宅医療で診ている患者さんのお宅では、とっ

ご家族に「もし、さきに判断するのは難しい。できるだけ元気な時に救急車を呼ぶから終末期に関する本人の希望を聞いて、最期を余裕があれば私に先に電話して、族で話し合っておくべきや」と口を酸っぱくして言つて

は気管切開、1カ月後には胃ろうを造設。3カ月後に亡くなるまで、病院のベッドの上で寝たきりです。母さんはとても朗らかで、社交的な人だった。それなのに、あんな苦し



ばくして言つて (写真はイメージ)